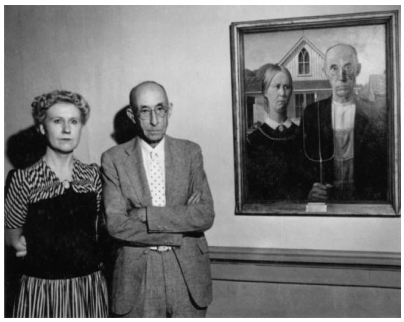
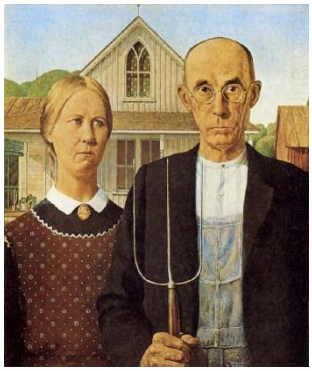
アメリカン・ゴシック・ハウスへようこそ！

「アメリカン・ゴシック」は、アイオワ出身の画家グラント・ウッドによって描かれました。ウッドは 1930 年、友人がエルドンで開いた展覧会に出席するため、この町を訪れました。滞在中、彼はエルドン出身のジョン・シャープという若い画家に出会いました。ある日の昼食後ジョンは、ウッドがこの町で描きたい題材を見つけてくれればと思い、町を案内しました。二人が町をドライブしているとき、今では有名になったこの家の外を通りました。家を見た時、ウッドはこの家を描かなければならないと思ったのです。彼はこのような小さく質素な家に大変装飾的な窓があることを、面白いと思いました。



ウッドは封筒の裏に家をスケッチし、彼が人生の大半を過ごしたアイオワのシーダーラピッズの自宅に持って帰りました。ウッドは妹のナン・ウッド・グレアムと彼のかかりつけ歯科医だったバイロン・マッキービーに、作中の 2 人のモデルとなるよう頼みました。2 人とも絵の中に描かれるのを嫌がりましたが、グラント・ウッドは絵を描くときには 2 人だとわからないようにすると約束しました。12 年後の 1942 年に撮影された写真を見ればわかるとおり、絵の人物がナンとマッキービーの 2 人であることは、はっきりとわかります（マッキービーは特に）。マッキービーは大変憤慨し、作品の完成後 10 年間にわたり、ウッドと口を利きませんでした。



マッキービーとのいざこざはあったものの、1930 年に絵を完成させたグラント・ウッドはシカゴ美術館の絵画展に出品し、そこで 3 位と 300 ドルの賞金を手にしました。コンクー

ルの後、シカゴ美術館は 300 ドルを追加してウッドの作品を買い取り、以来この絵はシカゴ美術館の所蔵となっています。今日この作品は、世界で 2 番目に知られている絵であるとされ、その価値は数百万ドルとも言われています。グラント・ウッドの名声と評価は、アイオワ州・エルドンのこの質素な家から始まったのです。

The Story of Grant Wood グラント・ウッドの物語

グラント・ウッドが生まれたアイオワ州アナモーサの家。1974 年に火災で焼失した。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

　グラント・ディヴォルソン・ウッドは、1891 年 2 月 13 日にアイオワ州アナモーサから 4 マイル東にある農家で生を受けた。グラントは、フランシス・メリヴィル・ウッドとハッティー・ディエット・ウィーヴァー・ウッドの第 2 子であった。

　グラントの父親は 1855 年にバージニア州で誕生した。人々は彼のミドルネームを「マーヴィル」と発音し、彼はその名で知られていた。南北戦争後、メリヴィルの両親ジョセフ・ウッドとレベッカ・ウッドは、子供たちとかつては奴隷だった使用人たちを連れ、幌馬車でアイオワに移ってきた。彼らはアナモーサ近郊の農地を 1 エーカー3 ドルで買い取り、家を建て、土地を耕した。2 人は 7 人の子供を儲けたが、そのうち 3 人を幼少のうちに亡くしている。メリヴィルは彼らの一番上の子供だった。

　ウッズ家はクエーカー教徒だったが、最寄りのクエーカー教会は 10 マイル離れたウィッ

ティアにあったため、一家は大抵日曜日になるとアナモーサの長老派教会に通っていた。メリヴィルがハッティー・ウィーヴァーと出会ったのもこの地であった。メリヴィルは日曜学校の教育長で、ハッティーは教会のオルガン奏者だった。

グラントの母親は 1858 年に生まれた。彼女の両親ディヴォルソン・ウィーヴァーとナンシー・ウィーヴァーはニューヨーク州の出身で、アナモーサの外れで宿を経営していた。宿は駅馬車が一夜を明かすための場だったが、火事によって破壊されてしまった。宿を失ったディヴォルソン・ウィーヴァーは、モロコシ製粉工場を始めた。しかしそれもまた、火事で焼失してしまうのだった。その後ディヴォルソンはジョーンズ郡の保安官に任命され、後にシーダーラピッズに居を移して自動車販売店を営んだ。メリヴィルと同様、ハッティーも 4 人兄弟の長子だった。

メリヴィルとハッティーは、どちらも教養があり、物静かで落ち着いていて、内向的な性質だった。2 人は 1886 年 1 月 6 日に結婚した。ハッティーの両親は、2 人に土地と上品な応接間家具を与えた。ハッティーは、11 年間の教師生活で多少の蓄えがあったので、応接間家具に合うようにと、豪華なウィルトン社製のベルベットじゅうたんを買った。一方のメリヴィルといえば、彼らの新居を建てるのに借金をしていた。この家で、1887 年にフランク、1891 年にグラント、1893 年にジョン、そして 1899 年に末っ子のナン（ナンシーの略称）の 4 人が生まれた。

アナモーサ近郊のアンティオーク・スクール。グラント・ウッドが 1901 年まで通った。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

　グラント・ウッドは幼少期をアナモーサの農場で過ごした。ここで彼は、農家の雑用や家畜の世話、庭仕事、そして自然のもたらす美や音を学んだ。また彼は絵を描き始めたが、それは農場の地下室で始まった。グラントは悪いことをしたときに、お仕置きで地下室に入れられた。地下室で過ごしている間、彼はクラッカーの箱のボール紙を見つけ、たくさんの卵を温めているニワトリを描いた。

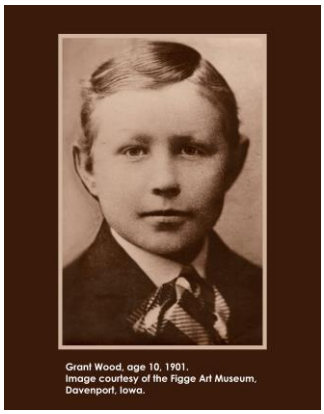
"My first studio was underneath the oval dining room table which was covered with a red-checkered cloth."

~Grant Wood

「私の最初のアトリエは、赤い格子柄の布に覆われた楕円形のダイニングテーブルの下だった。」――　グラント・ウッド

1898 年から 1901 年の間、グラントは農場から 1 マイル半のところにあるアンティオーク・スクールに徒歩で通っていた。この小さな田舎の学校には、コート掛けのある玄関ホールと、だるまストーブと生徒たちの机が並ぶ大きな部屋があった。8 学年がこの唯一の教室で学んでいた。教師も 1 人だけであった。グラントは、教室では時々地理と算数を苦手としていた。教師がグラントを当てたとき、彼はもじもじしているか空想にふけっていることが多かった。

その一方学校の外では、グラントは物事をよく観察している子供だった。その観察眼のおかげで、10 歳の頃には、地元紙に次のように書かれたほどである。「グラント・ウッドが彼の住む地域で 55 種類の鳥を発見したとのことである。この件に関して彼がもたらした情報は大変興味深く、彼が観察眼に優れ、思慮深く、意識の高い少年だということを表している。」



1901 年、10 歳の頃のグラント。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

無題。版権はフィギ美術館、ナン・ウッド・グレアムの遺産相続人。ニューヨーク州ニューヨーク市 VAGA により認定。

Move to the City 街への転居

1901 年 3 月 17 日、グラントの農場での暮らしは唐突に終わりを迎えた。父親が 46 歳で亡くなったのである。グラントは弱冠 10 歳、他の子供たちはそれぞれ 14 歳、8 歳、そして 1 歳半になろうかというときだった。何年もの後にグラントは、絵を通してその時の思い出を振り返っている。

1901 年 9 月、ハッティーは子供たちを連れ、アイオワ州シーダーラピッズのイースト 14 番街 318 番地に購入した家に転居した。グラントはそこで、生涯の友となる近所の子供たちに出会う。その 1 人がデーヴィッド・ターナーだった。グラントはポーク・スクールに通ったが、そこではやや浮いた存在だった。だが幸運にも彼はユーモアの持ち主だったので、自分を笑いの対象にして友達を作ることができた。

"To lose sight of Grant Wood's quiet, subtle humor is to misunderstand the man completely. There was little of bitterness or satire in him, much ingenuousness and wit and an infinite capacity to see the funny side of himself."

~Margaret Thoma, 1942

「グラント・ウッドの静かでさりげないユーモアがわからなければ、この人物をすっかり誤解してしまうことになる。彼には嫌味や皮肉めいたところがほとんどなく、無邪気で機転が利き、自分の面白さを引き出す無限の能力があった。」―マーガレット・トマ、1942 年

　都会に引っ越したからと言って、グラントが農家の出身であることを完全に忘れたわけではなかった。彼は母親の庭仕事を進んで手伝ったり、ロード家の牛の乳しぼりをしてお金を稼いだり、ウォイトシェック家の馬の世話をしたりした。

　その一方で、都会での生活は芸術に触れる機会をより多くもたらした。シーダーラピッズ教育委員会の美術主任だったグラッテン女史は、早くからグラントの才能に気づいていた。彼女の仕事場に来て制作に励めるよう、グラッテンはよくグラントに通常の授業を早退させていた。何でも好きなものが描けるようにと、グラントには絵の具や筆が与えられた。

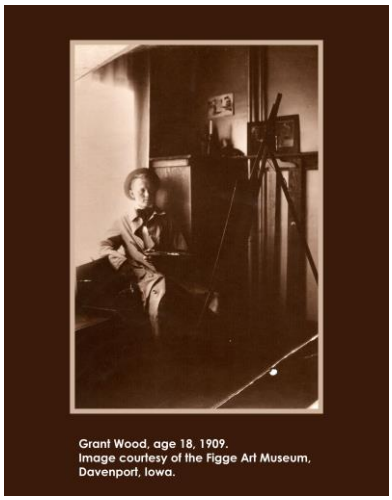
Grant′s First Art Contest 初めての美術コンクール

　1905 年、グラントが 14 歳の時、彼は全国クレヨンコンテストでオークの木の葉を描き、３位を獲得した。グラント・ウッドはのちに、この受賞によって芸術で身を立てていく自信

がついたと語っている。また地元紙シーダーラピッズ・ガゼットは、「このような大会での３位受賞は、類まれな芸術の才能があることを示すものだ」と書いた。

Grant Enters High School 高校入学

翌 1906 年、グラントはワシントン高校に入学した。彼は、もう一人の生涯の友となるマーヴィン・コーンと出会う。グラントとマーヴィンは共に芸術に強い関心を持っており、大変親しい友人となった。高校在学中２人は、演劇の舞台で使うセットを塗った。またグラントは、高校のイヤーブックにペンとインクを使った絵を描き、自分の妹に絵の描き方を教え始めた。グラントとマーヴィンは、シーダーラピッズ芸術協会で、展覧会用の絵画の荷解きをし、展示が終わるとそれを梱包するというボランティアもしていた。グラントは、展示室に寝泊まりして特に貴重な美術品の警備をするという仕事までした。



グラント・ウッド、18 歳。1909 年。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

Grant Graduates High School 高校卒業

1910 年、高校を卒業したまさにその日、グラントはバスに乗り、奨学金を受けてアーネスト・バッチェルダー講師の下で学ぶため、ミネアポリスの美術工芸組合を目指した。グラントは夏の間、そこで銅細工とハンドメイドジュエリーの技術を学び、実習後は組合のアトリエでプロの職人になった。しかし、この新しい仕事によって、大好きな絵を描くための時間はほとんどなくなってしまった。結局、そのために、彼は職場を去ったのだった。

Back on the Farm 再び農場へ

グラントは 1911 年の夏、農場での暮らしに戻ってきた。彼は友人と、シーダーラピッズから 30 マイルほど離れた所にある、ウォイトシェック姉妹の農場で働いた。仕事は問題なかったものの、二人は納屋で寝ていたため、夜は大きなネズミに悩まされた。この経験によって、グラントは新たな道を歩もうと決めることになる。

無題。版権はフィギ美術館、ナン・ウッド・グレアムの遺産相続人。ニューヨーク州ニューヨーク市 VAGA により認定。

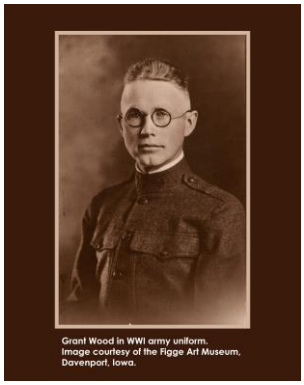
Grant Wood′s Early Career グラント・ウッドのキャリア初期

Grant Teachers 教師生活

グラントは教員免許を取得し、1911 年から 12 年まで、6 マイル離れたローズデールにある学校で教鞭をとった。この学校で教える最大の利点は、ここでの職務経験によって、高等教育を受けていなくても町のもっと大きな学校で教える資格が取れるということだった。ただし、彼が別の教職を得るまでには、やはり数年を要した。

Grant′s Art Education グラントが受けた美術教育

次の仕事が見つかるまでの数年間、グラントは技術を磨いて過ごしていた。彼は 1912 年のある時期に、自らのジュエリーと銅細工の工場を興した。1912 年から 13 年にかけては、アイオワシティで、正規に学生としての登録はせず、授業料を払うこともなく、実物のモデルを描く写生画の授業を受講していた。1913 年には、シカゴ美術館で美術の研究もした。シカゴでの生活費をまかなうため、彼はジュエリー制作の仕事も続けていた。



第一次世界大戦の陸軍の制服に身を包んだグラント・ウッド。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

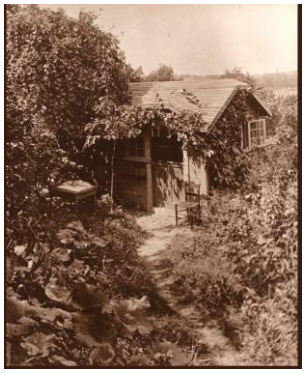
Grant Returns to Cedar Rapids 再びシーダー・ラピッズへ

ところが 1914 年、母親が家を失い、資金繰りに苦しんでいるとわかった。それを知るや否や、グラントはシーダーラピッズに戻ってきた。グラントや妹のナン、母のハッティーを含む家族は叔母のミニーの世話になり、グラントがいろいろな仕事を引き受けて生計を立てた。

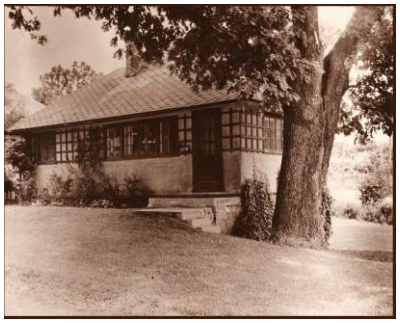
Grant Builds a Home グラント・ウッド、家を建てる

1915 年、グラントは、のちにシーダーラピッズの南東部になるケンウッドパークから１マイルの場所に、１エーカーの土地を購入した。彼は、家族３人で生活を送るのに十分な、小さくても質の良い小屋を建てるつもりだった。彼は家に、オランダ調の上下に分かれるタイプの扉と屋根を設けた。しかし、この小屋には、肝心の防寒設備がなかった。

翌年、グラントは３軒の家の建設を手伝った。２軒はポール・ハンソンの、１軒はグラントの家族のための家だった。1917 年から 1924 年の間、グローブコート 3178 番地が、彼らの自宅となった。この家にはしっかりと断熱が施されており、グラントも再び、創作活動に時間を充てることができるようになった。



グラント・ウッドがシーダーラピッズに建てた小屋。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）



グラント・ウッドがシーダーラピッズの、サウスイースト・グローブコート 3178 番地に建てた自宅。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

Grant Enters the Military 軍隊への入隊

グラントは、偏平足を理由に兵役を免除されていたが、1918 年にその資格を放棄し、芸術の才能を引き下げて、陸軍工兵隊の第 97 連隊へ入隊した。キャンプ・ドッジでの駐留中、グラントは暇があると鉛筆を持ち、歩兵からは 1 枚当たり 25 セント、将校からは 1 ドルをもらって、仲間の兵士たちを描いた。

グラントは病気になり、病院送りになった。彼の症状が「ただの」虫垂炎だと分かった時、インフルエンザの流行に忙殺されていた医師たちは、手術に反対した。グラントは、美術家たちと共に、ワシントン DC で偽の大砲づくりや本物の大砲をカモフラージュする作業をして、陸軍生活の残りを過ごした。停戦が決まるとグラントは除隊になり、1918 年のクリスマスイブに、自宅に戻ることとなった。

Grant Teaches Again 二度目の教師生活

陸軍除隊後の 1919 年、グラントはシーダーラピッズの公立学校の美術教師職に応募し、1927 年まで勤務した。ジャクソン中学校で教鞭をとり始めたとき、彼は服を買うお金がなかったため、陸軍の制服を着ていた。兵隊さんに教えてもらえる、と生徒たちは喜んだが、校長のフランシス・プレスコットは不安を抱いていた。しかし、最終的には彼女もグラントの味方となり、彼女が出世した時にはグラントを高校の職に就けてくれた。

Grant Goes to Europe グラント、欧州へ

グラントは二度欧州へ渡ろうとしたことがあったが、いずれも失敗に終わっていた。一度目はわずか 14 歳の時で、母親に反対されたため。二度目は陸軍に在籍していた時で、彼の偏平足に合う政府支給の靴が見つからなかったためだった。そのため彼は、貯金が出来次第渡航しようと、心に決めていた。1920 年の夏、グラントは幼馴染のマーヴィン・コーンと欧州に渡った。二度目の渡欧はずっと長く、1923 年の 6 月から 1924 年の 8 月までの 1 年間、グラントは教師を休職して、パリのアカデミー・ジュリアンで学んだ。海外にいる間、彼は自分の作品の一部を売って生活の足しにし、残りの作品は丁寧に梱包してアメリカへ持って帰った。

1920 年、最初の渡欧時、フランス滞在中のグラント・ウッド。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

No. 5 Turner Alley ターナー小路 5 番地

アメリカに戻ると、グラントは友人のデーヴィッド・ターナーに雇われて、ターナー葬儀社となる予定の、古い屋敷の改装に取り組んだ。ターナーは、グラントにまるで商売っ気がないことを知り、彼を助けたかったのだ。グラントが葬儀社の裏手にあるレンガ造りの納屋に興味を持っていると気づいたとき、ターナーはグラントに、屋根裏の干し草置場をアトリエとして使わせた。グラントは自費でその屋根裏を改装しなければならなかったが、ターナーはグラントから家賃を受け取らなかった。ほどなくしてその屋根裏は、グラントと家族の自宅となり、ターナー小路 5 番地として知られるようになった。一家は 1924 年から 1934 年までそこに住んでいた。自分の作品を売り、時折内装の仕事を引き受けていれば生活していけると確信したグラントは、1924 年から 25 年の 1 年間を最後に、教職を離れた。

The Memorial Window 記念館の窓

1926 年、グラントは三度目の渡欧をし、パリと南仏で絵を描いた。アイオワに帰ると、彼の名前は地域内で知られるようになっており、次から次へと壁画の仕事を頼まれるほどだった。1927 年には、シーダーラピッズにある退役軍人記念館のステンドグラス窓の制作に応募し、その契約を勝ち取った。この契約により、ステンドグラス制作の監督をしながらも、四度目、そして最後の渡欧が可能になった。

ステンドグラスは、完成すると高さ 24 フィートに及ぶもので、グラントは大きさに忠実にスケッチをした。グラントのアトリエで、そこまでの大きさの絵はほとんど描けなかった。クエーカー・オーツ社の部長だったアーサー・ポーが、大きな娯楽室を使わせてくれたとき、グラントは胸をなでおろした。その後は、遠近法が最大の難関となった。観客は下から窓を眺めるため、すべてを調和させるには、上に行くほど線と余白を広くとる必要があった。

この窓は当時、完成すれば国内最大のステンドグラス窓になる予定だった。そのため、グラントは、最良のものを使って作りたいと考えていた。世界で一番の職人はドイツのミュンヘンにいると聞くと、彼はドイツへ旅立った。

グラント・ウッドとステンドグラス職人たち。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

Grant's New Style グラントの新しいスタイル

　ミュンヘンへの旅は、グラント・ウッドの絵画を永遠に変えることになった。彼はフランス印象派を離れ、ドイツ滞在中に学んだゴシック画家の写実性を取り入れた。彼は、当時の洋服に用いられていた装飾に目を留め、ジグザグ上に編まれたエプロンの模様や、更紗模様、レースのカーテンなどに惹きつけられた。グラント・ウッドは、彼に発想をもたらすものは、アイオワの中に十分あるということに、気が付いたのだった。そして、自らの道を見出した彼の作品は、成功を収めることになった。

"After I realized the material around me was paintable, and started painting out of my own experience, my work had an emotional quality that was totally lacking before. I had to go to France to appreciate Iowa. That was the best way to get perspective."

~Grant Wood

「身の回りのものを題材に絵が描けると分かり、自分の経験をもとに描き始めたとき、私の作品には、以前には全く欠けていた、情感というものが備わるようになったのです。アイオワの良さを理解するため、私はフランスに行かねばなりませんでした。物事の見方を変えるためには、それが一番の方法なのです。」

－グラント・ウッド

1929 年、母親の肖像を描いた『女と植物』で、グラントは新しいスタイルを取り入れ始めた。翌年の 2 作品、『ストーン・シティ』と『アメリカン・ゴシック』によって、グラント・ウッドの人気は急激に高まった。両作品が、シカゴ美術館の第 43 回アメリカ絵画展に出品されると、『アメリカン・ゴシック』はノーマン・ウェイト・ハリス銅賞と賞金 300 ドルを受賞した。シカゴ美術館の後援者たちは、300 ドルを追加し、計 600 ドルでこの作品を買い取った。消費者物価指数を適用すると、これは現在の価値で 8,000 ドル近くに相当する。

Grant Wood′s Success グラント・ウッドの成功

Art Regionalism 芸術における地方主義

この新しい芸術様式は、地方主義として知られるようになった。この運動によって、芸術家たちは、自分にとって最も近しい人と場所を、自由に描けるように（場合によっては書けるように）なった。この運動から生まれた 3 人の最も著名な芸術家たちが、ミズーリ出身のトーマス・ハート・ベントン（1889-1975）、カンザスのジョン・スチュアート・カリー（1897-1946）、そしてアイオワのグラント・ウッド（1891-1942）である。

Stone City Art Colony ストーン・シティの芸術村

地方主義の推進者だったグラントは、1932 年から 33 年の夏に起こったストーン・シティの芸術村の発展において、中心的な存在の一人となった。彼は、地元の芸術家たちに、芸術を学ぶために、欧州に渡る必要はないということ、ここアイオワでそれができるということを、分かってもらいたいと思っていた。この試みは、芸術家にとっては成功に終わったが、経済的には失敗だった。1934 年 1 月、グラントがアイオワ大学に招かれ、教えることを承諾したとき、芸術村は指導者を失い、設立 2 年目で解体してしまった。

"…Grant inspired and taught the young painters…that in their own environment there is a wealth of material to interpret. It was once nearly impossible for an American artist to receive recognition without going to Europe to paint. …Grant, through his own work of teaching and lecturing, helped to change that."

~ John Steuart Curry, 1942

「…グラントは若い画家たちに刺激を与え、彼らに教えた。…、自分たちがすでにいる環境にこそ、描くべき題材が豊富に存在するのだと。かつてアメリカ人の芸術家にとって、ヨーロッパに行かずして絵画で名を馳せることは、およそ不可能だった。…グラントは、自ら教え講義をすることによって、それを変えたのである。」

－1942 年、ジョン・スチュアート・カリー

エイムスの PWAP にて、壁画制作の足場の近くに立つ、グラント・ウッド。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

Public Works of Art Project 芸術家雇用・融資プロジェクト

　アイオワ大学で教鞭をとることを持ち掛けられた頃、グラントは、芸術家雇用・融資プロジェクト（PWAP）の責任者の職も打診されていた。この連邦規模のプロジェクトは、職のない芸術家たちに手当を支給するというもので、彼の最初の仕事は、エイムスのアイオワ州立大学に新設される、図書館の壁画制作の監督だった。

教鞭をとるグラント・ウッド。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

University of Iowa アイオワ大学

　グラントは、アイオワ大学で臨時職として教え始めたが、すぐに正規の准教授に昇格することとなった。おかげで芸術学部の学生数は、1 年間で 550 人から 750 人に増えた。

Grant Marries Sara Maxon サラ・マクソンとの結婚

アイオワ大学で教え始めた後も、グラントはまだ引っ越していなかったが、1935 年 3 月にサラ・シャーマン・マクソンと結婚し、ついにアイオワシティに移ることになった。グラントはサラのことを、次のように語った。「我々は二人とも芸術家で、似たような考え方を持ち、同じタイプの人々を好む。…彼女は大変親切で、人を大切にする。家に人を呼べば、上手にもてなすことだろう。…私と同じく、彼女も様々な困難を乗り越えてきた。」

"Grant Wood is a rotund, compact, stoutish chap with a disarming, puckish grin and a soft deprecatory voice. But keep your eye on that grin—it's going somewhere.... A good guy, but not an obvious one."
~ Harry Engle

「グラント・ウッドは、小太りで、小柄で、がっちりとした体型をしており、人懐こくいたずらっ子のような笑みを浮かべ、その声は穏やかで控えめだった。しかし、その微笑みには、気を付けなけたほうがいい。彼は何か企んでいるからだ。…いい奴だが、一目でわかるいい奴というわけではない。」

–ハリー・エングル

Grant′s Mother Dies 母の死

グラントの母、ハッティーの健康状態は、思わしくなかった。長いこと床に伏せていた彼女をサラが看病していたが、1935 年 10 月に、亡くなった。グラントは、ウッド家の区画にある父の墓の隣ではなく、数列離れたところにある、実家のウィーヴァー家の区画に、彼女の棺を埋めた。7 年後、グラントは彼女の隣で、永遠の眠りにつくことになる。

Timeline

1928 年　『開拓者ジョン・B・ターナーの肖像』

1929 年　『女と植物』

『ゴードン・フェンネル・ジュニアの肖像』

『M・D・ポーター判事の肖像』

『フランシス・フィスク・マーシャルの肖像』

1930 年　『成人したアーノルド』

『ストーン・シティ』

『アメリカン・ゴシック』

『メアリー・ヴァン・ヴェクテン・シェーファーの肖像』

『スーザン・アンジェヴィーン・シェーファーの肖像』

『炉棚の上の装飾』

1931 年　『評価』

『ポール・リビアの真夜中の騎行』

『ハーバート・フーバーの生誕地』

『ヴィクトリア時代の生き残り』

『秋耕』

『青いトウモロコシ』

『格子柄のセーター』

1932 年　『革命の娘たち』

『植樹祭』

『ドナルド・マクマレー夫人の肖像』

『自画像』

1933 年　『ナンの肖像』

『日没前』

『木々と丘』

『競走馬』

『荷馬』

1934 年　『脱穀する人たちへの夕食』

1935 年　『ボヘミアからの帰還』

『リッジ・ロードの死』

Grant Moves to Iowa City アイオワ・シティへ

アイオワシティにあった、グラント・ウッドの自宅（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

グラントは、アイオワシティのコート通り 1142 番地にあった、大きくて古い南北戦争時代の家を購入し、改築した。グラントとサラは客をもてなすのが好きで、彼らの催すパーティーは有名だった。パーティーに招かれたのは、学生、教員、当地に立ち寄った著名人、友人などだった。この中で名を知られていたのは、詩人で作家のカール・サンドバーグ、哲学者のジョン・デューイ、バリトン歌手のローレンス・ティベット、米国農務省長官のヘンリー・A・ウォレスの他、ジョン・スチュアート・カリーやトーマス・ハート・ベントンといった、数々の芸術家たちだった。

名誉学位を授与されたグラント・ウッド（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

グラントは、1936 年にウィスコンシン大学から授与された名誉学位を、大変誇りに思っていた。彼は、その年に名誉学位を受賞した、8 人のうちの 1 人だった。グラントは他にも名誉学位を得ており、その中には、1939 年にイリノイ州エヴァンストンのノースウエスタン大学から受け取った、美術博士の学位がある。

グラント・ウッドは新たな挑戦として、シンクレア・ルイスの『本町通り』、マデリン・ダロウ・ホーンの "Farm on the Hill"（『丘の上の農場』）といった本の挿絵や、表紙の絵を描いたりした。彼はまた、ニューヨークのギャラリー、アソシエイテッド・アメリカン・アーティストのために、何作ものリトグラフを制作した。グラントは、1 年間に 4 作のリトグラフを発表することで、毎月小切手を受け取っていた。その後、アソシエイテッド・アメリカン・アーティストを自分のエージェントとして、良好な関係を保った。

The Marriage Ends 結婚生活の終わり

華やかな生活の一方、グラント・ウッドの結婚生活は、あまりうまく行っているとは言えなかった。二人は金銭感覚に関しては同類で、収入よりも多くのお金を消費するタイプだった。グラントはサラに、家を出るよう頼んだ。1938 年、グラントの妹のナンと夫のエド・グレアムがカリフォルニアの自宅に戻る際、サラは彼らについていき、シアトルに落ち着いた。

Conflict at the University 大学との対立

グラント・ウッドが絵画と講義の両面で活躍していた一方、彼の大学との関係は、少しずつ緊張の色を濃くしていた。芸術学部内で唯一の、自分の力で得た学位を持たない教授だった彼は、一部の教員からはあまり良い目で見られておらず、彼の仕事ぶりも、疑問や批判に晒されていた。学部内で最大の衝突は、美術修士号のカリキュラムにおいて、美術史と作品

創作のバランスをどうするか、という件に関してであった。この問題は、グラントにとっての大きな懸案事項で、彼は辞職を迫られた。しかし、彼は辞めることはせず、代わりに 1940 年から 41 年の 1 年間、休職することにした。

> "Wood was pestered almost from the beginning of his university career by departmental highbrows who could never understand why an Iowa small-towner received world attention while they, with all their obviously superior endowments, received none at all."
>
> ~ Thomas Hart Benton

「ウッドは、大学でのキャリアを始めたとほぼ同時に、学部内のインテリたちに悩まされることになった。彼らには、なぜ、このアイオワの小さな町から出てきた人物が世界的に注目されるのか、決して理解できなかった。ウッドよりずっとすぐれた才能がありながら、彼らはウッドが得ていた名声が全く受けられなかったのだから。」

– トーマス・ハート・ベントン

クリアレークでの最後の夏

グラントは、自身最後となる夏を、アイオワ州クリアレークのアトリエで、絵を描いて過ごした。このアトリエは、かつて鉄道の駅舎だった所にあった。ここで彼は、2 つの連作、『わが町の春』と『わが国の春』に最後の筆を加え、完成させた。

クリアレークにあった、グラント・ウッドのアトリエ。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

Timeline (continued)

1936 年　『春の曲がり角』

1938 年　リトグラフシリーズ

1939 年　『パーソン・ウィームスの寓話』

『干し草作り』

『新しい道』

1940 年　『センチメンタル・バラード』

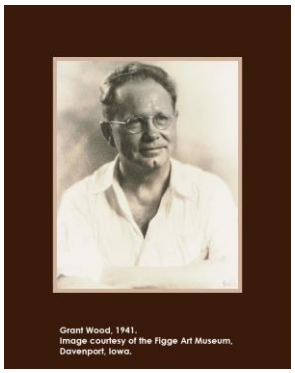
『一月』

『思春期』

『アメリカン・ゴルファー　チャールズ・キャンベルの肖像』

1941 年　『わが国の春』

『わが町の春』



1941 年のグラント・ウッド。（写真はアイオワ州ダベンポートのフィギ美術館の厚意により転載。）

The Beginning of the End 終わりの始まり

1941 年、事務職員たちの強い支援のおかげで、グラントは美術の正教授としての職を得て、大学に戻った。新しい契約の下で、彼のスケジュールと指導スタイルには、より大きな柔軟性が与えられた。

しかし不幸にも、彼の身体は、キャリアほど丈夫ではなかった。1941 年 12 月、グラントは癌の診断を受ける。死を覚悟しながらも、彼は明るく将来について語った。彼の計画には、父親の肖像を描くことも含まれていたが、それは叶わなかった。1942 年 2 月 12 日、51 回目の誕生日まであと 2 時間というところで、グラント・ウッドは亡くなった。

Grant′s Legacy グラントの遺産

グラント・ウッドは、彼の風景画に描かれた、波打つ丘と丸い木々によって、人々の心に刻まれるだろう。『アメリカン・ゴシック』で、彼は私たちに、自分自身を笑いの対象とすることを教えてくれた。アイオワで生まれ育ち、国際的に認められた彼を、私たちは誇りに思う。

References 参考

グラント・ウッドの物語についてもっと知りたい方は、ジュリー・ジェンセン・マクドナルド著、”Grant Wood and Little Sister Nan”（『グラント・ウッドと妹のナン』）および、ナン・ウッド・グレアム、ジョン・ズッグ、ジュリー・ジェンセン・マクドナルド著、“My Brother, Grant Wood”（『我が兄、グラント・ウッド』）をお読みください。

Looking at the Painting American Gothic「アメリカン・ゴシック」を鑑賞する

撮影者不明。ナン・ウッド・グレアムとD・H・マッキービー歯科医。シカゴ美術館にて。1942年。シーダーラピッズ美術館アーカイブより。

『アメリカン・ゴシック』は、写実的である。しかし、ウッドがこの絵に施したデザインの奥行を知ることは重要である。一見しただけでは、多くの人が『アメリカン・ゴシック』を写実的な絵だと言うだろう。ある意味それは正しい。この絵を見てから、絵のモデルとなった実際の家を見れば、絵が家を非常に写実的に解釈していることは一目瞭然である。ウッドの2人のモデルであるナンと、かかりつけ歯科医のB・H・マッキービーも、やはり写実的に再現されている。妹のナンの顔は、モデルが彼女だとわからないよう、幾分長めに書かれているが。

「現実」を自由に用いるウッドの手法は、絵に加えられた納屋や、家の前に建つ男女といった、現実にはなかった風景の創作に、見て取ることができる。この作品のモデルたちは、『アメリカン・ゴシック』の制作が行われる以前や最中には、全く会ったことがなかった。

A close look 近づいて見てみよう

作品を注意深く見てみると、『アメリカン・ゴシック』が実際はどのように「デザイン」され、構成されたのかがわかる。

The House 家

ウッドは当初明らかに、いわゆる中西部の「典型」の「肖像」を描くつもりだった。しかし、知られているように、アイオワ州エルドンのこの家が、ウッドによって『アメリカン・ゴシック』と呼ばれる作品を生み出した。それは、現存する下描きのスケッチの中に現れているのが、この家だけだということからもわかる。

別の初期のスケッチでは、男女が家の前に置かれ、完成作品と大変似た構図を取っている。ウッドがこのような配置を選んだのは、被写体をその人物の自宅の前に置くという、19 世紀後半から 20 世紀初頭の旅行写真家の慣行が影響しているのかもしれない。

こうした写真中の人物の配置は、そうしたのが家の持ち主であろうと、写真家であろうと、アメリカ人の自己表現、とりわけ家族の自己表現が、家と強く結びついていることの証拠でもある。アメリカの地方において、家が象徴するのは家族だけではない。家は最大の金融資産であり、家族同士が協力して勤勉に働いていることを示しているのである。

人目を引く独特な 2 階部分のアーチ窓には、機能性や実用性は見当たらない。つまりこの窓は、余計な手間と出費をかけて、装飾のためだけに設けられたのである。

ウッドはめったに自分の作品を解説することがなく、この家を選んだ理由を明らかにしていない。ありふれた家をこの窓によって実際より豪華に見せようとした所有者を、ウッドはからかっていたのだろうか。それとも、所有者の選択（と彼らが負担した余分な費用）に敬意を表し、芸術を通してその意見を表明しようとしたのだろうか（その敬意がなければ意見を述べる必要もあるまい）。誰にも真実はわからない。ただ言えるのは、ウッドの選択はたまたま行われたものではないということだ。ウッドは構図上の要素を、極めて慎重に取り扱った。よって、この家を選んだことには「何らかの」意味があったのだ。

The Plants 植物

ウッドが素描を描いたとき、家の玄関ポーチに植物は置かれていなかった。なぜ、ゼラニウムとサンセベリアが含まれるようになったのだろうか。ウッドはこの選択の理由を明かしてはいないが、植物は象徴的な意味合いを含むことがよくある。ゼラニウムは、時に哀愁、また植物の中ではとりわけ、無能さを表すのに用いられる。

グラント・ウッド研究の第一人者であり、”Grant Wood: The Regionalist Vision”（『グラント・ウッドー地方主義者の先見』）の著者でもあるワンダ・コーンは、サンセベリアの強さが開拓者のアイオワ女性たちに好まれていたのではないか、ウッドがサンセベリアを用いたのは、単に彼女たちの強さを表したかったからではないか、と推測している。

同じ植物はまた、1929 年にウッドが描いた彼の母親の肖像にも登場する。『女と植物』で母親は、『アメリカン・ゴシック』と同様に背景の木々と同じ形を繰り返すゼラニウム（とベゴニア）の手前に座り、体の前にはサンセベリアの鉢植えを抱いている。

何を表象していようと、これらの植物が構図上大切な役割を果たしていることは、明らかである。ゼラニウムは家の裏手の木々と同じ形を反復し、サンセベリアの 3 枚の葉も、規模は小さいながら、窓の形、熊手、そしてオーバーオールの縫い目を繰り返している。

グラント・ウッド「女と植物」1929

油彩。アプソン制画板。20 1/2 インチ×17 7/8 インチ。

シーダーラピッズ美術館購入。

『アメリカン・ゴシック』の女性が着ているエプロンを縁どるジグザグ模様の縫い目は、『女と植物』の母親のエプロンにも登場していること、そして二人ともカメオのブローチを身に着けていることも、特筆すべきだろう。

The Hayfork 熊手

現存する素描を見ると、男性は、実際の作品中に描かれた三又の干し草用熊手ではなく、枯葉用の熊手を持っている。これもまた、気まぐれによる選択ではない。ウッドのふざけたユーモア感覚を知っている研究者たちは、熊手のもつ意味について、終わりなき考察を重ねている。これは、悪魔が持っている熊手を暗示しているのだろうか。それともそこまで不吉な意味はないのだろうか。もしウッドが生きていてこのような発言をするとしたら、彼はその言葉を自分の心の中だけで言うことだろう。

一つ明らかなことは、熊手の形は、男性が着ているオーバーオールからシャツへとつながる縫い目にも見られるほど、ウッドが重要視していたということである。熊手の形は、絵の構図においてもある機能を果たしている。上下逆さまにすると、2 階の窓枠の形と酷似しているのである。このようなパターンの繰り返しは、作品の構図に活気を与え、リズムをもたらしている。

The Window 窓

この作品中の重要な構成要素は、窓にある。この窓には、2 つの同じ形をしたアーチがあり、変わった形の窓枠に覆われ、頂上で 1 つに交わっている。

作品全体を見てみると、隣り合わせに並ぶ 2 人の人物によって、窓の両半分の形状が繰り返され、窓全体の形も繰り返されている。家の屋根は男女につながっているが、これは変わった形の一番上の窓枠が、2 つのアーチにつながっているのと同様である。

You Ask, We Tell! お尋ねください。お答えします！

- グラント・ウッドは、どのようにしてエルドンにたどり着いたのですか？
- グラント・ウッドは、どうやってこの家を見つけたのですか？
- この家は、当時と同じ場所にあるのですか？
- この家を建てた人たちは、なぜゴシック様式の窓を作ったのですか？
- エルドンを去った後、ジョン・シャープはどうなったのですか？
- リトル・アート・ギャラリーの後、エドワード・ローワンはどうなったのですか？
- 1930 年のエルドンは、どんな町だったのですか？

続きを読めば、これらの質問の答えとその先がわかります！

How did Grant Wood end up in Eldon? グラント・ウッドは、どのようにしてエルドンにたどり着いたのですか？

ジョン・シャープとエドワード・ローワンが、グラント・ウッドが 1930 年にアイオワ州エルドンを訪れるきっかけを作りました。

ジョン・シャープ、1928 年（写真はマクハフィー・オペラ・ハウスによる。）

Who was John Sharp? ジョン・シャープとは？

ジョン・シャープ（1911-1966）は、エルドン出身の才能豊かな人物で、1930 年以前から、ウッドやローワンとは知り合いでした。

シャープは 1928 年から 30 年まで、アイオワシティのアイオワ大学の学生でした。彼はシーダーラピッズのリトル・ギャラリーを訪れ、そこでグラント・ウッドとエドワード・ローワンに出会いました。

Who was Edward Rowan? エドワード・ローワンとは？

エドワード・ビーティ・ローワン、1934 年。ハリスとユーイング撮影。

モノクロ。28 cm×19 cm。（スミソニアン協会、米国芸術公文書館、エドワード・ビーティ・ローワン文書 1929-1946）

エドワード・ローワン（1898～1946）は、シーダーラピッズ・リトル・ギャラリー、通称リトル・ギャラリーの代表でした。リトル・ギャラリーは、アメリカ美術協会の支援を受けていました。

ローワンは 1928 年に、ハーバード大学で美術修士号を取りました。アメリカ美術協会は、実験的にコミュ

ニティ・アートを実践するよう、ローワンに働きかけました。彼は、地元の人々に美術への関心を持ってもらい、限られた予算の中でも地域が美術に触れられるよう指導するため、シーダーラピッズに送られたのです。ニューヨークのカーネギー財団は、このプロジェクトには 3 年から 5 年はかかると見込み、5 万ドルを支給しました。このお金で、リトル・ギャラリーが出来たのです。

1930 年、ローワンは、地方のコミュニティに 1 か月間限定でギャラリーを設けるという、館外活動を終えました。ローワンがシャープと知り合いだったことが直接影響したのか、それともローワン自身が何らかの理由でエルドンを選んだのか、彼がこのプロジェクトをエルドンで行うと決めた理由は、はっきりしていません。しかし、ローワンが次のようなことをしたいと思っていたということは、わかっています。

「…ある種の物事から隔絶された、小さな中西部のコミュニティであっても、美術を鑑賞する機会さえ与えられれば、彼らは熱心な反応を示す、ということ。」、

ローワンは、1930 年 8 月の 1 か月間、アイオワ州エルドンのウエストエルム通り 710 番地にあった、A・G・ダニエルズの家を借りました。ローワンの妻リータと 3 人の小さい息子たちも、エルドンにやってきました。家は、ハイウェイ 16 のクレマー葬儀社の東側に位置していました。1990 年に火災で焼失してから、現在は駐車場として使われています。

１階の３部屋は、毎週日曜の午後に紹介される、新しい展示作品に使われました。ローワンと彼の妻は、レセプションを開いて市民に美術についての講義をしました。幅広い年齢の子供たちを対象にスケッチと水彩画のクラスを、やや年齢が上の子供たちには音楽鑑賞のクラスを開いたりもしました。すべての活動は無料で、一般に開かれていました。

ローワンはまず、シカゴの有名な画家、フレデリック・テランダーの水彩画と油彩画、ハント、ディーデリッチ、ボーグラム、バージ、ハリエット・フリシュマットの彫刻やブロンズ作品を選びました。テランダーのコレクションは、すでにアイオワ中を巡回していました。

8 月 10 日からの第３週、ローワンは 8 人のシーダーラピッズ出身の芸術家たちを特集し、その中にウッドが含まれていました。この週は、グラフィックの過程、エッチング、そして木版画が扱われました。そして最終週の展示は、オタムワのジョセフ・タウンゼンド・ファンク、エルドンのジョン・シャープといった、ワペロ郡の芸術家を取り上げました。

ローワンは、その時に手に入る地元の芸術家たちの作品を用い、経費を低く抑えました。彼は芸術家たちに、どこかへ行く際はエルドンに立ち寄り、彼らの才能をここで共有するよう、伝えていました。芸術家たちは美術の公開授業をし、人々に学習の機会ももたらしました。そういった芸術家たちの一人が、グラント・ウッドだったのです。

SEEN AT ART EXHIBIT

Eldon, Aug. 5.—The flower study "Yellow Roses," painted by Grant Wood, is included in an art exhibit here which is being shown by Mr. and Mrs. Edward B. Rowan of Cedar Rapids. "Yellow Roses" is one of a group that will be shown next Sunday, when the work of eight Cedar Rapids artists will be featured.

The public is invited to attend this exhibit, which is shown at 210 West Elm street.

オタムワ・クーリエ、１９３０年８月５日号

エルドン、８月５日。グラント・ウッドによる油彩画「黄色い薔薇」が、シーダーラピッズのエドワード・B・ローワン夫妻が開く絵画展に含まれている。「黄色い薔薇」は、次の日曜日に公開される、シーダーラピッズを拠点とする８人の芸術家たちの作品の一つ。

この展示は、ウエストエルム通り 210 番地にて、一般に向けて公開される。

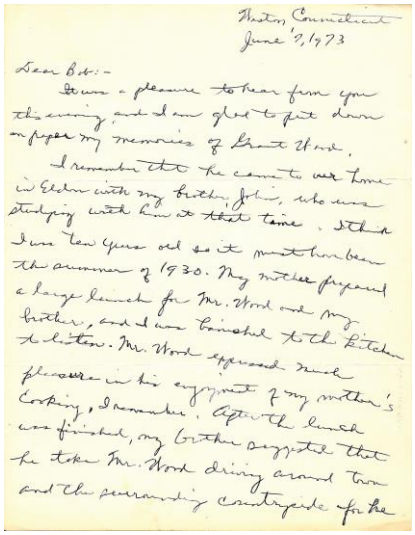
ギディオン（ギッド）・ジョーンズ。（写真は孫娘のヘレン・グラッソンの厚意による。）

How did Grant Wood find the house? グラント・ウッドは、どうやってこの家を見つけたのですか？

グラント・ウッドは、エルドンを訪れたときに、地元の芸術家ジョン・シャープに再会しました。1973 年 6 月 7 日にシャープの弟、エドワードが書いた手紙の中の回想によると、彼はウッドのことを、次のように思い出しています。

「…（ウッドは）私の兄ジョンとともに、エルドンの我々の家を訪れた。…母がウッド氏と兄のために、盛大な昼食を用意し、私は台所に追いやられてやり取りを聞いていた。ウッド氏は、母の料理を味わえて大変嬉しいと言っていたように思う。昼食が終わると、兄はウッド氏に、描きたくなるような面白い題材が見つかるかもしれないから、町と周辺の田園地帯を案内する、と言った。そのドライブの最中、ジョン・シャープはウッド氏を連れて、あちこちで車を止めた。ウッド氏は、美しい窓を持つこの家を見つけるや否や、その窓を観察するため、ジョンに車を止めるよう頼んだ。兄の車の中に腰を下ろしたまま、彼はポケットから一枚の封筒を取り出し、窓のデザインを描いたと記憶している。」

ウッドのインタビューも、彼が窓を見たときに面白いと思ったことを紹介しています。彼は窓を、このような小さい家にしてはもったいぶっていると言い、こんな家に誰が住んでいるのだろうと想像し、その肖像を描こうと思い立ったのです。ジョンソン家の許可を得ると、彼は封筒の裏に思い付いたことをスケッチし始めました。他の絵を描いた時と同様、彼はその場で思い付いたことをスケッチし、シーダーラピッズのアトリエに戻ってから、完成させたのです。



Norton, Connecticut
June 7, 1973

Dear Bob:-

It was a pleasure to hear from you the evening and I am glad to put down on paper my memories of Grant Hill.

I remember that we came to our home in Eldon with my brother, John, who was studying with him at that time. I think I was ten years old so it must have been the summer of 1930. My mother prepared a large lunch for Mr. Wood and my brother, and I was banished to the kitchen to listen. Mr. Wood expressed much pleasure in his enjoyment of my mother's cooking, I remember. After the lunch was finished, my brother suggested that he take Mr. Wood driving around town and the surrounding countryside for the

1973 年 6 月 7 日に、エドワード・シャープがロバート（ボブ）・ワイデンバックに宛てた 3 枚の手紙の 1 枚目。（エルドン・カーネギー市立図書館の厚意による。）

ジョーンズ家は、どのような人たちだったのですか？

1930 年、家はメアリー・ハート・ジョーンズ（1855-1941）とギディオン・ジョーンズ夫妻が所有していました。ジョーンズ家は 1917 年に、C・A・ディブルからこの家を購入し、1933 年まで所有していました。

エルドンに移ってくる前、ジョーンズ夫妻はアイオワのラッズデールに住んでいました。ラッズデールは、エルドンからさほど遠くないところにあった、会社所有の炭鉱地区でした。石炭がなくなると会社もいなくなり、ラッズデールの町は姿を消してしまいました。

ジョーンズ氏、通称ギッドは、２頭の大変良いラバを飼っており、その２頭が彼の荷馬車運搬業の生活を支えていました。彼は１回１ドルで、砂であろうと水であろうと、誰かが運んでほしいというものは何でも運んでいました。

ジョーンズ夫人は、「居心地の良い」家庭を築いていました。床には古布を使って手作りした敷物が何枚も敷かれていました。そして、大きな庭では、美味しいリーフレタスやグリンピース、インゲン豆、イチゴ、ラズベリーなどを育てていました。リンゴの木の他、タチアオイ、ひまわり、ビジョナデシコ、ピンクナデシコ、ムギワラギクといった花もありました。

1930 年の 8 月、当時 75 歳のジョーンズ夫人が、外で我が家を描いているウッドを見たとき、彼女は家の中や外を綺麗にするのを手伝ってもらおうと、娘を呼びました。二人は２階の窓からレースのカーテンを外し、洗ってしわを伸ばしました。そして、玄関ポーチに座ってウッドを待ちました。しかし、ウッドが戻ってくることはありませんでした。彼はもう、絵の構想に必要なものはすべて手に入れていたのです。ウッドが絵の中の窓に違うカーテンをかけたと知った二人は、どれほど驚いたことでしょう。

メアリー・ハート・ジョーンズ。（写真は孫娘のヘレン・グラッソンの厚意による。）

この家は、当時と同じ場所にあるのですか？

1960 年代から 70 年代初めにかけて、この家をもっと便利な場所に動かそうという話がありましたが、結局実現しませんでした。家は 1974 年より国家歴史登録材として登録されており、所有者は 1991 年からアイオワ州歴史協会になっています。そして、2007 年に無料のアメリカン・ゴシック・センターが併設されたのちも、家は当時と同じ場所にあります。

年代順に並べられたアメリカン・ゴシック・ハウス。上から 1940 年、年代不明、1965 年 6 月、1973 年 6 月家の前に建つナン・ウッド・グレアムと。

この家を建てた人たちは、なぜゴシック様式の窓を作ったのですか？

なぜディブル家が、彼らの家の切妻屋根にゴシック様式の窓を入れることにしたのか、それはわかっていません。彼らはシアーズのカタログを見てこの窓を買ったと信じられていますが、一般的には教会の建物に見られるこの窓を選んだ理由は、定かではありません。人生や仕事上の困難がある中で、ディブル家が自分たちの日常に加えることができた、ささやかな美、と言うこともできるでしょう。

一方ゴシック様式の窓は、「大工ゴシック」と呼ばれ、19 世紀半ばの流行にも見られていました。この様式は、短期間で建てられる家や、細部に凝ったものを望む声から生まれました。細部に凝ったものを木造家屋に加える価格はかなり下がり、相当質素な家でも、少し装飾的なものを加えることができるようになりました。大工ゴシックの特徴には、急こう配の屋根と切妻、彫刻を施した玄関ポーチの手すり、木製の羽目板といった縦方向を強調したデザイン、そしてもちろん、先端の尖ったアーチ形の窓があります。

ディブル家は、どのような人たちだったのですか？

家の建築当時からあった部分には、2 つのゴシック様式の窓があり、それは 1881 年から 82 年にかけて、キャサリンとチャールズ・ディブル夫妻によって建てられました。家の元の所有者の名を取って、この家は国家歴史登録材に、「ディブル・ハウス」、「通称アメリカン・ゴシック・ハウス」として載っています。ディブル氏はエルドンで、馬の世話を請け負う厩舎を営んでいました。ディブル氏は後に、税金の滞納のため、家を手放し売ったようです。

エルドンを去った後、ジョン・シャープはどうなったのですか？

エドワード・ローワンは、ジョン・シャープの芸術に将来を感じました。1930 年のエルドンでの展示会から数か月後、ローワンはシャープに、4 つの芸術研究員職の 1 つを与えました。この研究員の仕事によって、シャープは、画家のジャロスラフ・ブロジックの指導の下で 4 週間の集中研究をするため、アイオワのダベンポートへ行けることになりました。シャープの他の 3 人の芸術家たちは、シーダーラピッズのエヴァート・ジェフリーとアーノルド・パイル、そしてオタムワのバーナード・ファーガソンでした。

シャープはウッドやローワンとの関係を保ち、1932 年には学生として、ストーン・シティの芸術村に参加しました。そこでシャープは、より真剣に美術を学ぶ決心をしました。オタムワ出身でその時はニューヨーク在住だった、キャロル・M・サックスの経済的支援により、シャープはニューヨークの芸術学生連盟で、教育を受け続けることになりました。また、国立デザインアカデミーとグリニッジ陶芸学校にも在籍し、絵画と陶芸を学びました。

シャープはバランスの取れた美術教育を受けたのち、ペンシルベニアのニューホープに居を移しました。そこで彼は何年もの間、生活を送りながらアトリエを維持していました。シャープは教師になり、彼の下で学ぶ生徒は増え続けました。彼は地元の芸術や演劇作品に関わり、バックス郡劇場の設立に携わりました。シャープは、地元の風景や人々を題材とし、個人としての作品も制作し続けました。

シャープは、地元アイオワを忘れたわけではありませんでした。彼は、郵便局の壁画を制作するための、3つの異なる芸術家連邦プロジェクトの委託を受けました。壁画は次の 3 作品です。

- 「アイオワの秋」 アイオワ州ブルームフィールドにある、秋の田園風景を描いた作品。
- 「夏」 木の実を集め、ガチョウに水をやる家族を描いた作品。アイオワ州ロックウェルシティの壁を飾る。
- 「雪の中の狩人たち」 典型的な中西部の冬の風景を写した作品。アイオワ州ハワーデン。

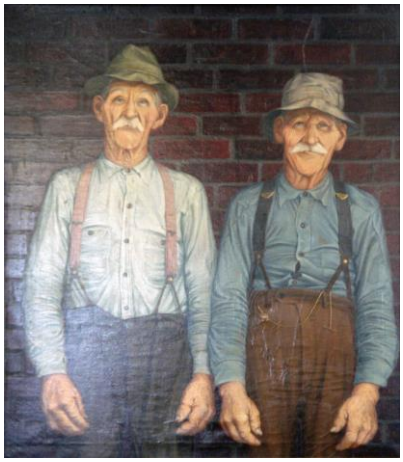
1961 年にエルドンの両親の元を訪ねたシャープは、エルドンのファーストナショナル銀行に、自らの作品「サムとデイヴ」を寄贈しました。これは、ペンシルベニアのオランダ系農夫 2 人を描いたものです。この作品は現在、ウエストエルム通り 608 番地にあるエルドン・カーネギー市立図書館が所有し、そこに飾られています。

後世シャープは、冬はフロリダのパームビーチで、夏はマサチューセッツのナンタケット島で過ごしました。シャープはどちらの土地にもアトリエを構え、美術を教え続けました。シャープはかなりの成功を収め、彼の作品はアメリカ合衆国およびカナダの多くの美術館を飾りました。

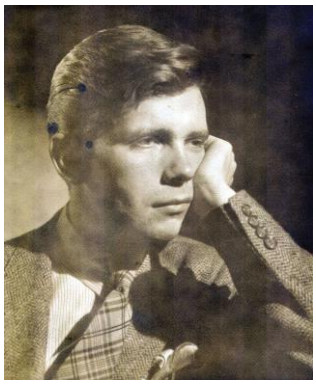
ジョン・シャープは生涯独身で、1966 年に 55 歳で亡くなりました。彼の亡骸は、フロリダのウエストパームビーチにある墓地に葬られています。彼の作品は今でも、ペンシルベニア州パックス郡ドイルズタウンにある、ジェームズ・A・ミシュナー美術館と、エルドン・カーネギー市立図書館で鑑賞することができます。

ジョン・シャープ作、「トンプソン・ニーリーの納屋、ワシントン・クロッシング公園」（エルドン・カーネギー市立図書館）

ジョン・シャープ作の壁画、「アイオワの秋」。アイオワ州ブルームフィールド郵便局。



ジョン・シャープ作、「サムとデイヴ」。（エルドン・カーネギー市立図書館）



ジョン・シャープ。撮影者不明。（ペンシルベニア州ドイルズタウン、ジェームズ・A・ミシュナー美術館）

What happened to Edward Rowan after the Little Art Gallery?

リトル・アート・ギャラリーの後、エドワード・ローワンはどうなったのですか？

エドワード・ローワンは、1928 年から 1934 年まで、シーダーラピッズのリトル・ギャラリーの代表を務め続けました。ウッドとローワンは、シーダーラピッズ地区にて、共同でいくつかの特別企画を行い、その中にはストーン・シティの芸術村もありました。ローワンも、ウッドや学生たちと同様に、氷を運ぶ荷馬車の中で寝泊まりしていました。彼の荷馬車は、白くシンプルに塗られたもので、花が植えられた箱で飾られていました。

1934 年ローワンは、全米芸術連合総裁、F・A・ホワイティングの特別補佐官に昇格しました。芸術連合のオフィスはワシントン DC にあったため、ローワンは 1946 年に亡くなるまで、その土地で過ごしました。ローワンは全米各地で、連邦政府が支援する壁画制作に携わる芸術家たちを指導しました。彼の職務は以下のようなものでした。

- 任命を行う審査員団の指揮
- デザインの批評
- 技術的な指導

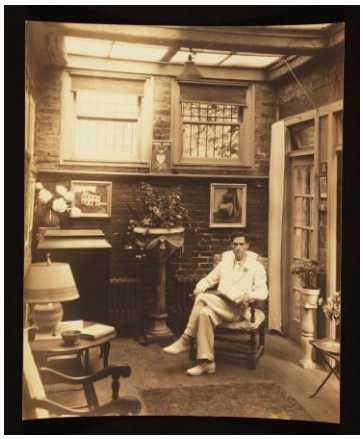
ローワンはアイオワから離れましたが、中西部の芸術家たちとは関係を保ち続け、彼らの作品を推薦したり宣伝したりしていました。

ローワンは常に芸術の強力な支持者で、進化し続けるアメリカのアートシーンについての講義のため、アメリカ合衆国およびカナダを広く飛び回りました。彼は旧友を訪ねるため、シーダーラピッズにも頻繁に戻ってきました。助言者や友人として彼が支えた 8 千人の芸術家たちこそが、彼の業績の遺産となっています。

エドワード・ローワンは 1946 年に亡くなり、バージニア州アーリントンの、アーリントン国立墓地に葬られています。

エドワード・ビーティ・ローワン、1930 年。

モノクロ。10 cm ×13 cm。（スミソニアン協会、米国芸術公文書館、エドワード・ビーティ・ローワン文書 1929-1946）



エドワード・ビーティ・ローワン、ワシントン DC の自宅アパートで。1932 年。

ルイス・P・ウォルツ撮影。モノクロ。23 cm ×19 cm。

（スミソニアン協会、米国芸術公文書館、エドワード・ビーティ・ローワン文書 1929-1946）

What did the town of Eldon look like in 1930? 1930 年のエルドンは、どんな町だったのですか？

1930 年のエルドンの町は、小さくとも、鉄道による成長著しい町でした。ローワンはエルドンのことを次のよ

うに語っています。

「…2 千人が住む小さな地域で、多くの住民は芸術作品の現物を見たこともない。」

アイオワ州の小さな地図を見ているとき、ローワンはエルドンに「舗装道路の終点」と書いてあるのを見つけました。実際、エルドンはそうだったのです。その頃、エルドンとセルマを結ぶ道路はまだ建設されていませんでした。

ローワンは、大変興味を惹かれました。エルドンの人たちは、美術展にどのような反応を示すだろう、と。彼は次のようなことを願いました。

「…エルドン市民のように外から隔絶された人たちも、（芸術が）彼らのところにやってくれば、人生の喜びである芸術に真摯に興味を抱いてくれること」

またローワンは、エルドン近郊のオタムワでも、芸術への関心を高めたいと思っていました。これに関して、彼はいくらか成功を収めたようです。オタムワ・クーリエ新聞は次のように書いています。

「…エルドンのみならず、オタムワ、そして近郊の地域でも、エルドンのギャラリーへの反応は…大変好ましいものである。」

しかし残念ながら、この展示をきっかけとして、オタムワに美術館を始められるぐらいの関心を掘り起こすというローワンの夢は、結局叶いませんでした。

ドゥードルバグ式車両を前にする、鉄道従業員の懇親会。ジェームス・グリーンランドが一番左手にいる。

（エルドン・ロックアイランド鉄道駅舎）

ロックアイランド鉄道駅。（エルドン・ロックアイランド鉄道駅舎）

In short… つまり…

エルドンでエドワード・ローワンが興したアートギャラリー、ジョン・シャープの芸術家としての歩み、そしてグラント・ウッドの両者との親交が、アメリカの象徴が誕生する舞台をアイオワ州エルドンに築いたのです。

そしてウッドがこの小さな家のスケッチを自宅に持って帰ったことから、アメリカン・ゴシックはすぐに、永久に私たちの文化の一部となったのです。

Thank you… ご支援ありがとうございます…

この展示は、アライアントエネルギー基金からの協賛によって、一部が運営されています。

補助資料：

クリスティ・レイン "Edward Beatty Rowan"

マウント・マーシー・カレッジ "When Tillage Begins: The Stone City Art Colony and School"